

Die deutsche Aufklärung und die Prägung des
historischen Japanbilds : Zum Stand der E.
Kaempfer-Forschung

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮島, 光志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5415

ドイツ啓蒙主義と歴史的日本像の形成

— ケンプファー研究の現況に寄せて —

宮 島 光 志

ドイツ語教室

(平成11年10月20日受理)

Die deutsche Aufklärung und die Prägung des historischen Japanbilds

— Zum Stand der E. Kaempfer-Forschung —

Mitsushi MIYAJIMA

Seminar für Deutsch

Zusammenfassung: Im Zeitalter der europäischen Aufklärung waren verschiedene Kenntnisse über Japan (bzw. das historische Japanbild) in westeuropäischen Ländern verbreitet. Diese Kenntnisse stammten zwar bis 17 Jh. ausschließlich aus missionarischen Jesuiten, aber ab 18. Jh. spielte Engelbert Kaempfer (1651-1715) durch seine Schriften über Japan die wichtigste Rolle. Obwohl bei uns in Japan Kaempfer nicht so viel beachtet worden ist als Ph. F. von Siebold, ist die Kaempfer-Forschungen seit zehn Jahren sowohl in Deutschland als auch teilweise in Japan blühend. Als Beispiele dazu sind P. Kapitzas großartige Materialiensammlung *Japan in Eurpoa* und W. Michels "Engelbert Kaempfer Forum" durch Internet zu nennen. Nachdem wir den Stand solcher Kaempfer-Forschungen kurz überblicken, betrachten wir Immanuel Kants Japanbild in seiner physischen Geographie, das die weitreichenden Einflüsse Kaempfers vorbildhaft dokumentieren soll.

Schlüsselwörter: Japanbild, Engelbert Kaempfer, die deutsche Aufklärung, Kants Geographie, Quellengeschichte, interkulturelles Verstehen

はじめに——ドイツで抱いた素朴な疑問

何人的な思い出にわたるが、1998年の新春に滞在先のドイツで日本から届いたカント関連の新刊書に目を通した際に、カントの地理学書を紹介した次の一節にいささか疑問を感じた。それは、「いずれにせよ、本書〔カントの『自然地理学』〕は脈絡に欠けているし、聖徳太子も源氏物語（紫式部）も金閣寺（足利義満）もなく、日本の姿は貧相である。プレーゲル河沿岸の

国際的港町の情報力に頼ったカントにも日本はよく見えていなかったのであろう。⁽¹⁾ という記述であった。たしかに何気なく読めばもっともな指摘であるが、しばらくして私の疑念は、「だが、このように語ることが本当に有意義なのであろうか？」という形で次第に先鋭化していったのである。

私の疑念はごく素朴なものであった。すなわちそれは、たしかにカントは今日われわれ日本人が誇りうる「日本文化の粋」を知らなかったかもしれないが、そもそも——この際、当時の日本国内で自国の文化についてどの程度の知識や理解が浸透していたかは問わないとしても——一般に当時のヨーロッパでは、日本に関するそうした情報がどの程度まで流通していたのであろうか、という問いである。裏返して言えば、18世紀の日本が——ごく一部の例外を除いて——世界に対してほぼ全面的にみずからを閉ざしていたという事情（いわゆる鎖国体制）を考えるならば、日本に関する基本情報がきわめて乏しかったとしてもそれは致し方ないのではないか。むしろ重要なのは、「そうした困難な状況にもかかわらず、あるいはまさにそれゆえに、ヨーロッパ人が日本に対して並々ならぬ好奇心を抱いていた」という事実の方であって、カントの日本への眼差しについても、彼の異文化に対する深い関心を示す具体例として、より広範な文化史—思想史的なコンテクストのなかで評価されるべきではないのか。

以下では、そうした素朴かつ包括的な問題意識を背景として、まず「ドイツ啓蒙主義の日本像」に関する研究の現況を——その鍵を握るエンゲルベルト・ケンプファー（Engelbert Kaempfer, 1651-1716；ただし、わが国では「ケンペル」と呼び慣わされてきた）にスポットを当てながら——管見の及ぶかぎりで紹介し（第1節から第4節まで）、そのうえで本稿の発端となった「カントの日本像」をモデルケースとして取り上げて内容を紹介しながら若干の分析を試みたい（第5節と第6節）。そうしたなかで「ドイツ啓蒙主義の日本像」という包括的な研究課題に取り組むための視座を明確にし、あわせて異文化理解ないし比較文化論の問題についても反省してみたい。

1. わが国におけるケンプファー研究——低迷状況からの脱却

これも個人的な思い出に属するが、上述の疑念を晴らすべく、さっそく滞在先の大学図書館で関連文献の渉猟を始めると、まもなく日本学のコーナーで圧倒的なヴォリュームを誇る比較的新しい——ただし、相当に使い込まれた——研究書に出会った。詳細については次節に譲るが、そのときの驚きはいまでもはっきりと思い出される。「日本のドイツ研究」が量質ともに「ドイツの日本研究」を圧倒しており⁽²⁾、両者のあいだの不均衡はじつに嘆かわしい、という馬鹿げた思い込みは無惨にも打ち砕かれ、私は一転して「これはまずい……」という危機感に襲われることになった。そのとき私は、学術研究全般について言われる「ドイツ的な徹底性」をまざまざと見せつけられ、この「ドイツ啓蒙主義の日本像」という研究課題も生半可な取り込みを許さない厳しいものであることを予感させられたのである。

そうした想いを胸に、帰国後、さっそく手近なところから関連する研究文献を捜してみると、その結果はどうであったか。ドイツ啓蒙主義を含む「近代ヨーロッパ人の日本像」を跡づけて検証する試みは、間違いなくわが国でも地道に積み重ねられていた。たとえば、洋学（とりわけ蘭学）関連の書誌情報を見れば、過去1世紀以上にわたって相当数の関連研究が公表されてきたことがわかる⁽³⁾。だが、それにもかかわらず、それらは概して散発的なものにとどまり、そうした研究成果が適切な形で蓄積ないし淘汰されることはなかったように思われる。

また、16世紀から19世紀にかけてヨーロッパで出版された日本関連の基本文献がこれまで盛んに日本語に翻訳・紹介されてきたのは事実であるが⁽⁴⁾、それらを今日的な視点から分析および評価する作業がどの程度おこなわれているかは、残念ながら、はなはだ疑問である。

いずれにしても、少なくともケンプファー（ケンペル）とシーボルトという日独交流史に燦然と輝く両巨頭を比べてみた場合、両者のあいだに150年もの時間的な隔たりがあるせいか、一般にわが国では——例の国禁を犯す事件の首謀者としても勇名を馳せた——シーボルトの方がはるかに有名である。だが、どうもドイツの側ではかなり事情が違うようである。われわれにとって——マルコ・ポーロとまでいかなくとも——ザビエルやフロイスのようにどこか伝説めいた人物であるケンプファーが、10年ほど前からドイツ語圏の日本研究においてにわかに脚光を浴びるようになってきたのである⁽⁵⁾。

もっとも、わが国でもケンプファーに関する先駆的研究が存在したことを見逃してはならない。その筆頭に挙げねばならないのが小堀桂一郎によるケンプファー『鎖国論』の訳出と詳細な検討であって⁽⁶⁾、これは四半世紀も前に出た小編であるにもかかわらず、今日から見てもきわめて刺激的な研究である。具体的に言えば、ケンプファーの旅に明け暮れた生涯や代表作『日本誌』がヨーロッパ諸国で流布するまでの複雑な経緯が的確に概説されており、日欧双方における『鎖国論』の影響史を丹念が掘り起こされている点はもちろんのこと、さらに歴史上の「鎖国体制」を現代日本の社会状況との関係で見直そうとする問題意識などに、小堀の仕事がもつ今日的な意義が認められる。

また、最近ではヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみた日本』⁽⁷⁾が包括的なケンプファー研究として大いに注目される。本書はドイツで活躍する日本学研究者を編者に迎え、独・日・英の研究者たちを糾合して編み上げた論集であり、「急浮上した世界のケンペル研究」という興味深い座談も採録されている。編者は緒言で「ケンペルは日本文化を研究するにあたって、これまでの遍歴と経験をふまえておのずからヨーロッパ、その他アジア、中近東地域と「比較する」眼を有しており、事物を「客観的に」とらえる姿勢を身につけていた」（同書、4-5頁）点を強調しているが、同様に芳賀徹も「ケンペルと比較文化の眼」（第Ⅲ部・第1章）と題して、比較文化や地域研究の先駆者としてのケンプファーに光を当てている。こうした今日的な視点からの再評価によって、ケンプファー研究がさらに活性化していくものと思われる。

2. 資料史的研究の基盤整備——P・カピッツァ編書の起爆力

本節で取り上げる研究成果は、私が——前節の冒頭で示唆したように——まずその圧倒的なヴォリュームに驚嘆し、その後「ドイツ啓蒙主義の日本像」を解明するための基礎資料とみなすようになった大著、ペーター・カピッツァ編『ヨーロッパにおける日本——マルコ・ポーロからヴィルヘルム・フォン・フンボルトまで、ヨーロッパ人が知っていた日本の姿を原典と図版で辿る』（全3巻、1990年）⁽⁸⁾である。

本書の全体構成と特徴について述べるならば、その副題からも察せられるように、本書には13世紀末のマルコ・ポーロか19世紀前半のフンボルトまで（ちょうどシーボルトが登場する直前まで）、約500年間にヨーロッパ諸国で出版された日本関連のあらゆる文献が網羅的に集大成されている。その総数は500点にも及び、簡潔な概説を付して引用された原典は、上下巻を併せて2000頁に達するほどである。それに加えて、採録された多数の図版はもちろんのこと、別巻に収められた周到な日欧語対照表、さまざまな索引、年表、さらには文献表などの資料が、本書の価値をさらに高めているのである。

ところで、本書には「ヨーロッパ人の眼に映じた日本——はしがき」という日本語の小冊子が添付されているので、以下ではそこから——少し長くなるが——ケンプファーの功績に言及した箇所を引用して、編者カピッツァの基本見解を確認しておきたい。

「オランダ東インド会社の社員たちは、17世紀の最初の20年間に、彼らの研究意欲発揮の新しい活動分野の開拓を開始する（Rumpf, Cleyer, Meisterなど）。1712年に900ページにも及ぶKaempferの、“Amoenitates exoticae”が出版される以前すでに、東インドとヨーロッパの間では、自然科学的テーマをめぐっての学者間の文通があり、医学、薬学、植物学などの分野でのもろもろの見聞が伝えられ、植物標本がヨーロッパへ送られ、新知識のヨーロッパでの普及が推進されている（「^{もく*}文なる中国の武器を使つての痛風の克服」）。そしてついに、1727年に英語で出版されたKaempferの日本関係の著作は、そのいくつかの外国語への翻訳（1749年にはその一部がドイツ語に逆翻訳されさえした）ともども、その日本儒教論によって、ヨーロッパ啓蒙思潮陣営に、啓蒙国家は教会などという社会機構の後盾なしにでも十分機能し得るといふ有力な論拠を与えた。以上の理由により、Kaempferが提供した日本儒教についてのこの情報は、日本の神話および日本の支配者たちについての彼の記述と並んで、ヨーロッパの啓蒙思潮陣営によって、彼の博物学関係の著作よりはるかに高く評価された。Thunbergの“Resa”が出るまで、50年以上にわたり、ヨーロッパのこの分野はほとんどKaempferの独壇場だった。手応えのある競争相手としては、カナダで布教活動をしていたことのあるイエズス会士Charlevoixだけだった。彼は時代の趨勢を見抜き、1736年には浩瀚な日本史を世に問うたが、それは、イエズス会の活動とKaempferの著作を非常に手際よくつなぎ合わせたもので、おかげでこの彼の著書は当時の百科辞書時代の時流に投じ、Kaempferと並んで、日本関係のスタンダード・ワー

クの一つとしてあちこちで引用された。」(同冊子, 14-15頁)

すなわち、カピッツァの説によれば、ヨーロッパの啓蒙主義に対するケンプファーの功績は、日本に関する信頼に足る博物学的な知識をもたらしたこと以上に、儒教や神道などを紹介することによって「比較思想的な視点」を提供した点に認められるのである。そもそもカピッツァは以前からの——啓蒙主義の時代に古代人と近代人との文化的な優劣をめぐって繰り広げられた——「新旧論争」への関心から「ヨーロッパにおける日本」の問題に取り組むことになっそうであるが⁹⁾、そうした比較文化的な視点がここにも導入されているのである。

3. インターネット・フォーラムの開設——W・ミヒェルの挑戦

ところで、今日のような高度情報化社会においては、どのような学問分野をとってみても、じつに膨大な情報の収集から始まって、その整理および加工、さらには発信にまで至る一連のプロセスが、きわめて重要な意味をもっている。実際、われわれ人文科学系の文献学的研究の場合であっても、カビ臭い古書を相手に訓詁注釈に明け暮れるといった「古色蒼然たる」研究スタイルはすっかり過去のものとなり、個々の研究分野の性格や研究者個人の関心および能力の違いによって程度の差こそあれ、何らかの「コンピュータ支援」なしには日々の研究活動が立ち行かなくなってきた。

こうした事情は、とりわけ私のように、純粋に地理的な条件から見ても、そしてより本質的には設備面(端的には収蔵する関連文献の量と質)をとって見ても、およそ「ドイツ啓蒙主義に関する資料史的研究」などとは縁遠い研究環境に身を置く者にとって、じつに有り難いご時世の到来を意味する。とりわけ、インターネットを用いて自由自在に世界中の最新の情報を収集できるようになったことにより、さまざまな理由による研究環境の格差はかなりの程度まで解消できるようになったのではないか。つまり、各自の創意工夫しだいで特色ある研究を推進するチャンスが増大した、と言える。だが、それと同時に、もはや研究環境を言い訳にできない厳しい時代を迎えたことを、みずから肝に銘じなくてはならないのである。

以下では、私がそうした関心からケンプファー研究に関する情報を求めて国内の諸研究機関のホームページを検索した結果をもとに、重要であると思われる3件の概要を紹介したい。

I. W・ミヒェル主宰の「ケンプファー・フォーラム」——Engelbert Kaempfer Forum: Main Menu (<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~michel/serv/ek/index.html>)

このホームページの開設者 Wolfgang Michel は永年にわたり九州大学で教鞭を執っており、ドイツ語の教科書も数多く出版している。彼の研究分野はじつに広範で、医学史、異文化理解の諸相から、さらにはインターネット教育にまで及んでいる。

ミヒェルはケンプファー研究を1つの中核として広範な欧日文化交流史研究に取り組んでおり、その全体構想はきわめて壮大である。彼は国際的なケンプファー研究者として、D・ハルパーラント編『エンゲルベルト・ケンプファー』やL・ヴァルター編『西洋の目からみた日本』

(註7)を参照)などへの寄稿をつうじて、近年の研究成果を精力的に公表している。この「ケンプファー・フォーラム」にかぎって見ても、その研究蓄積の豊かさとそれを整理し提供する手際の良さは、特筆に値する。たとえば、ケンプファー関連の文献リストについて見れば、その圧倒的な分量(A4版で72頁にわたる!)は言うに及ばず、ジャンル別の分類がきわめて周到であり、それらを見ただけでもわれわれはケンプファーの多岐にわたる影響力を直観的に理解できるのである。なお、ケンプファーの年譜に関しては、欧日交流史全般を扱った——おそらく作成途中のものと思われる——年譜も参照すると、さらに好都合であろう。

最後になったが、このフォーラムでは、英語および独語版『日本誌』をはじめとして、ケンプファーの主要な諸著作のデータベース化が進められている。厳密な資料史的研究を目指す多数の研究者が今後このフォーラムに集うものと、私自身は大いに期待したい。

II. 国際日本文化研究センター所蔵のケンプファー関連図書——「所蔵図書データベース」の検索 (<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/>)

正直なところ、「ケンペル」による検索結果が「14件ヒットしました」と表示されたときには、期待が大きかっただけに、私は大いに落胆した。内訳は、1970年代以降の邦語文献が8件と、ケンプファーの羅・英・独語の原典(ただしマイクロ版およびファクシミリ版のみ)が6件のみである(稀覯本は収蔵していない模様)。だが、この研究センターが平成10年度の研究課題の1つに掲げた「19世紀の「日本」発見——旅行と旅行記の中の異文化像」には、大いに注目したい。なぜなら、近年ではドイツ語圏でも、ドイツ啓蒙主義研究の課題として「旅の文化史(社会思想史、文学史)」が盛んに論じられているからである⁽⁴⁰⁾。それら日独で別個に得られた研究成果を互いに摺り合わせて比較研究を展開することができるかどうか、いずれ機会を改めて検討してみたいものである。

なお、ここで付言すれば、東京にあるドイツ人の日本研究機関として1世紀以上の伝統を誇る財団法人OAGドイツ東洋文化研究協会(<http://www2.gol.com/users/oagtokyo/>)でも、現在、図書館の検索サービスを準備中であり、その実現が待ち望まれる。

III. 大阪大学所蔵の日本関連貴重図書——第1回大阪大学附属図書館所蔵貴重図書展示会目録 (<http://www.library.osaka-u.ac.jp/kanpo/tenlist.htm>)

上記の研究センターと好対照なのが、阪大図書館が誇る日本に関する稀覯本のコレクションである。それらは16世紀末から20世紀前半にかけて欧米諸国で刊行された38点にわたり、18世紀までの文献としては、イエズス会系とオランダ東インド会社系の双方がバランスよく収集されている。本稿の内容に直接に関連する文献としては、仏訳版ケンプファー『日本誌』(目録番号11番)とイタリア語版サーモン『世界史』(同12番;なお、本稿第6節の著作リストでは、*1がその独訳版に当たる)が挙げられる。すべての文献について正式な書名と最低限の書誌情報、さらには簡潔な解説が添えられており、好便である。

4. フランス啓蒙思想研究における蓄積——その先駆的な意義

さて、そもそもドイツ啓蒙主義は先行するフランス啓蒙思想からきわめて多くの影響を受けていたのであるから、われわれはここでフランス語圏における同様の研究にも目を向けてみなくてはならない。すると驚くべきことに、あの浩瀚な『百科全書』に採録された日本関連のすべての項目を洗い出すという大がかりな作業がすでに18世紀末から積み重ねられており、そうした研究史の蓄積を踏まえて、近年ではわが国でもその集大成が試みられたのである。

われわれはまず、中川久定の論考「一八世紀フランス『百科全書』の日本観——日本に関する六五項目の紹介と考察」⁽⁴¹⁾に注目したい。この論考はすでに四半世紀前に公表されたものであるが、そこからはわが国の『百科全書』研究の厚みと、碩学ならではの文献学的手腕の確かさが見て取られる。特に注目したいのは各項目の典拠をめぐる問題であって、当該の65項目は、ポッセヴィーノ『論文選集』(1593年)を唯一の例外として、すべて17世紀半ばから18世紀前半にかけて刊行された19点の文献を典拠として執筆されていたことが示されている。それらのなかでケンプファーの『日本誌』(英語原典版1712年、仏訳版1732年)が際立った位置を占めていたことも、周到な分析による一覧表から一目瞭然である。

同じく『百科全書』にスポットを当てた研究として、中川も先行研究として——1972年に発表されたその原型に——言及していた市川慎一の論考「百科全書派の日本観」⁽⁴²⁾も見逃すことができない。この論考にはジョクールによる項目「日本」の要約と、ディドロによる項目「日本人の哲学」の全訳が収められており、とりわけ後者は基礎資料として貴重である。市川はそれら2つの項目を分析した結果、「百科全書派の中で中国、インドや日本のような東洋諸国に興味をしめした人たちがいたのは事実であるが、彼らは独自の政治的あるいは宗教的主張にこれら東洋人のあり方をうまく適応できる範囲で遠隔の地を利用していたという感が強い」(同書、220頁)と結論づけている。

最後に、近代フランスにおける日本関連の文献を網羅的に紹介した最近の文献として、山内昶『青い目に映った日本人——戦国・江戸期の日仏文化情報誌』(人文書院、1998年)を見ておきたい。本書の構成は「前編 キリシタン期の日仏文化情報史」と「後編 鎖国期の日仏文化情報史」とに二分されているが、本稿と直接に関連するのは後編の「第三章 フランスのなかの日本」である。すなわち、まずその第1節では17世紀後半の日本情報が扱われ、カロンからベールまで13編が、そして続く第2節では18世紀前半の日本情報が扱われ、シャルルヴォア、ディドロ、モンテスキューを含む26編が紹介されている。さらに第3節では18世紀後半の日本情報が取り上げられ、『百科全書』から始まり、ルソー、ヴォルテールなどを含む36編が紹介されている。中川や市川が特定の著作を集中的に分析したのとは対照的に、山内は全体像(ないし趨勢)を俯瞰するための基本情報の提供を目指しており、簡潔な文献紹介と豊富に採録された図版とがあいまって、その目的は十分に達成されていると思われる。ちなみに、著者は「日仏関係の初期史〔18世紀以前〕は資料の制約もあって、これまでほとんど手つかずの空白のま

ま放置されてきた。素人の特権を利用して、向こう見ずにもこの処女地の開拓を思いつたのも、じつはドイツの日本学者カピッツァが……」（はじめに）と、カピッツァから受けた恩恵を率直に表明している。

5. モデルケースとしての「カントの日本像」——その全体像の輪郭づけ

ヨーロッパの「啓蒙主義の時代」においては、それに先立つ「大航海時代」以来の「世界的視圏の成立過程」（和辻哲郎『鎖国——日本の悲劇』の前篇タイトル）が一段落したのを承けて、とりわけ18世紀になると新たなグローバルな知見を学問的・体系的に整理統合する動きが現れた。皮肉なことに、こうした動向はみずから積極的な海外進出を図ることのなかったドイツで活発となり、しかも東プロイセンの郷里（ケーニヒスベルク）からの旅を頑固なまでに拒んだとされる哲学者カント（Immanuel Kant, 1724–1804）が、長年にわたる自然地理学講義によってその先駆者となった。

カントが講じた自然地理学は、「自然」と「人間」とが織りなす「世界」をその全体にわたって、しかもその具体的な相貌に即して理解することを目指していた。さらに言えば、カントは地理学の教育上の意義を重視し、「地理学的な啓蒙」⁽¹³⁾を推進しようとしていたのである。ところが、彼の地理学思想は——文献学的な諸困難という事情も手伝って⁽¹⁴⁾——今日でもカント研究の未開拓分野として残されており、現代の地理学者たちからは多くの場合「A・フォン・フンボルトおよびC・リッター以前の古い地理学の遺物」と見なされている⁽¹⁵⁾。そうしたカント地理学全体に関わる諸問題はしばらくおき、「日本」関連の記述にかぎってみても、じつはその基本テキストはいまだにアカデミー版のカント全集には採録されておらず、彼の死後ちょうど150年をへた1954年に、カントと同郷のインド学者、グラーゼナップの努力によってはじめてその全体像が知られるようになったのである⁽¹⁶⁾。以下でその主要な部分を訳出してみたい（なお、文中の【 】は宮島が便宜的に付けた小見出しである）。

「日本。【呼称】住民たちからはニホン（Nippon）と呼ばれている。【国土】それは、マダガスカルおよびボルネオに次いで、あらゆる島のうちで最大の島に数えられる。さらにそれには、狭い水路によって切り離された大小さまざまな島が属している。それら以外にも、カイザーは朝鮮の一部とカムチャッカの南部を領有している。国土は驚くほど人口稠密である。【街道】人々は長崎から江戸まで全長200ドイツ・マイルのあいだに、城郭をもった33の大都市と城壁のない75の都市と、非常に多くの村を通して旅行する。それらの村はいつも数珠繋がりになっているので、人々はただ1つの街を通るよりも〔ほかの街道を使う方が〕何マイルも先に旅行できるほどである。【地勢】国土は山地が非常に多く、あちこちに火山があるが、それらはすでに鎮まっていることもまだ暴れていることもある。温泉があり地震も起こる。【気候】日本の北部はかなり寒いが、概してこの島では天候が定まらない。だが、雨は6月と7月に最もよく降る。

【政体】日本には、内裏と呼ばれ、都に住んでいる1人の宗教的な君主〔天皇〕と、公方と名乗る世俗的な君主〔将軍〕とがいる。内裏はかつては全島を支配したが、いまは都という街とそれに属する諸地方以外には自分の領地をもっていない。なぜなら、公方がいまやこの全島の王権をもつカイザーだからである。【鎖国体制】長崎以外には1つの港も異国人に対して開かれていない。しかもオランダ人とシナ人に対してだけで、それも長崎の街ではなくそれに付属する出島という島が開かれているにすぎない。人々はその島に異国人を監禁できるのである。

〔国民性〕【容姿】日本人はたいてい頭が大きく鼻は平らで、（シナ人ほどではなくとも）眼は小さい。体軀は小さく、ずんぐりしている。顔の色は褐色で髪は黒い。【性格】彼らは注意深く、誠実で、行儀がよく、勤勉で、困難にもよく耐える。——それ以外では、彼らは邪推し、ダットン人のように短気であり、非常に頑固であり、死を恐れない。彼らは復讐をつぎつぎに継承する。

【家屋】彼らは家を建築する際にきちんとした部屋には区切らず、衝立によって必要なだけ部屋を作ることができる。彼らの家屋の木製品にはすべて漆が塗られている。〔中略〕

【食物】彼らは食事の際にありとあらゆる草本を、たとえ有毒のものであろうと食事に供することを知っている。彼らはバターやチーズを知らない。【儀礼】彼らの挨拶はシナ人の挨拶ととても似ているが、それほど煩わしくはない。【自殺＝切腹】彼らは概して進んで自殺に身を委ねる。ある大きな祭礼の最後に、高位の主君が時々その家来たちを呼んで彼らのうちで誰か腹を切り裂いて主君の榮譽を讃える気があるかと訊ねる。すると家来たちは、事もあろうにその榮譽をめぐる次第に喧嘩を始めるのである。【火葬】彼らは死者たちを焼く。

【刑罰の厳しさ】〔省略〕【喧嘩両成敗】〔省略〕【連座制】〔省略〕【拷問】〔省略〕

〔宗教〕【先祖崇拜】彼らは至高の存在を承認している。だが、その存在は余りにも気高くして人間を氣遣うことなどできないので、彼らは死別した人々の神格化された靈魂に祈りを捧げる。【狐憑き】〔省略〕【神道の優位】〔省略〕【キリスト教弾圧＝路み絵】一般的な迫害以後もこの国の長崎周辺にはかつてのキリスト教徒たちが残っているが、彼らは毎年、十字架とマリア像を足で踏むことを強要される。自分の良心のゆえにこうしたことのできない人々は、投獄される。だが、カイザーによる禁止は、主にカトリックの宗教を対象とする。

〔学問と技術〕【算盤】〔省略〕【医術＝鍼灸】〔省略〕【金属加工】〔省略〕

【和紙】〔省略〕【集約的農業】〔省略〕【茶の栽培】〔省略〕

〔天産物〕【金、銀、銅】〔省略〕【漆工芸】〔省略〕【樟腦】〔省略〕【フグの猛毒】〔省略〕

以上の記述をさらに類似の諸断片なども参照にしながら¹⁷⁾総合的に判断すると、われわれ

はカントの日本観の主要な論点ないし特色を、ほぼ次のように纏めることができるであろう。(1) 厳しい鎖国体制の冷静な分析, (2) 権威の二重構造 (天皇と将軍), (3) 諸宗教の併存 (宗教的寛容) とキリスト教の弾圧, (4) 激しい国民性と厳罰主義 (規律正しさ), (5) 産業や技術・文化の独自性 (その豊かさ), (6) 「中国との対比」という視点の導入, (7) 「ヨーロッパの自己批判」という視点 (布教の表面性, 海外侵略の不当性)。そしてこれらの論点は、今日われわれの一般的な日本史および世界史の理解に照らしてみても、けっして「お伽噺」のような荒唐無稽なものではなく、十分に了解可能な論点や視点であると思われる。カントはそうした日本に関する広範な情報を、当時の地理学関連の著作によって入手していたとされる。次節では、そうした情報源をごく大まかにに辿ってみたい⁽¹⁸⁾。

6. カントの情報源——ケンプファー『日本誌』の広範な流布状況

ケンプファーの主著『日本誌』は——重訳や抜粋、さらには折衷など——さまざまに手を加えられて、18世紀全体を通じて西ヨーロッパ諸国に広まっていった (『廻国奇観』を加えた関連諸著作は下記のとおりである)。ドイツ語による著作としては7種類 (*1~*7) が流布していたが、グラゼナップの考証によれば⁽¹⁹⁾、カント自身は主に1733年の概説版 (*1) と1753年の重訳版 (*3) とを閲読し、そこから日本に関する情報を得ていたのである。

1712: *Amoenitatum Exoticarum* (ラテン語原典版)

* 1727: *History of Japan* (『日本誌』英語原典版, J. G. Scheuchzer 訳)

(1729: 同書仏訳版, 1732年: 同書蘭訳版)

*¹ 1733: *Die Heutige Historie oder der Gegenwärtige Staat aller Nationen* 所収の
“eine umständliche Beschreibung des Großen Kaiserthums Japan”
(独語重訳の概説版, M. von Goch 編, A. H. 訳)

*² 1749: Joh. Bapt. Du Halde, *Ausgefühl. Beschreibung des Chinesischen Reiches
und der großen Tartarey* 所収の “D. Engelbrecht Kämpfers Beschreibung des
Japanischen Reiches” (独語重訳の概説版)

*³ 1753: *Allgemeine Historie der Reisen zu Wasser und zu Lande*
(英語原典版および仏訳版からの独語重訳版?, Naude 訳)

*⁴ 1777-79: *Geschichte und Beschreibung von Japan*

(英語原典版に基づき増補された独訳決定版, Prof. Chr. Wilh. Dohm 編)

*⁵ 1783: *Abgekürzte Geschichte und Beschreibung des japanischen Reiches* (第2版)

*⁶ 1783: *Kritische und philosophische Bemerkungen über Japan und die Japaner* (抜粋版)

*⁷ 1794: Karl Peter Thunberg, *Reise durch einen Teil von Europa, Afrika und Asien,
hauptsächlich in Japan in den Jahren 1770-1779* (独語折衷版)

1933: *Seltsame Asien* (忠実な独訳版)

ドイツ啓蒙主義と歴史的日本像の形成

つまり、これら諸々の著作によって日本に関する多様な情報が18世紀ヨーロッパの読書界に流通していたわけであるが、カント自身はそうした情報の一端を受け取り、みずからの自然地理学講義によってその情報を——直接的には広範な聴講者たちに対して——さらに広める役割を果たしたのである。そこでわれわれは、今後の具体的な検討課題として、そうした情報の流れとその具体的な内容を、細部にまでわたって精査してみなくてはならない。その際には、「情報集約型」思想家の典型であるカントにかぎらず——たとえば「実地体験型」の思想家を代表するヘルダーなどの場合にも——それぞれの思想家や文学者の日本像がどの情報源に依拠していたのか、そしてどの程度までそこに私見（解釈）が交えられているのかといった点も、詳細に解明する必要に迫られるであろう。

われわれは実際にそうした作業を開始するに当たって、先に見たフランス語圏の『百科全書』に定位した研究を模範とすることが許されよう。すなわち、ドイツ啓蒙主義の「知の殿堂」と目されるツェードラーの学術事典（J. H. Zedler, *Grosses vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste*, 64 Bände + 4 Supplementbände, 1732-1750/51-54）の際立った地位を考慮に入れて、そこに採録された日本関連の項目を洗い出す作業から始めるべきであろう。すでにカピッツァはこの事典から「日本」および「陶器」という2つの長大な項目を採録しているが、それら以外にどのような日本関連の項目が記載されているかは、目下のところ不明である。ただし、『百科全書』の記載項目のほかにも、諸種の文献に付された事項索引（さらには人名索引および地名索引）を有力な手掛かりとして⁽²⁰⁾、ある程度の予測に基づいて作業を進めることが可能となるであろう。

むすびにかえて——責務としての「日本からの発信」

もしも「200年以上も昔にヨーロッパ人たちが描いた日本像をいまさら検証してみても何になるのか？」と問われたならば、われわれは「いくら万事がめまぐるしく変移する現代社会であっても、ひとたび定着したその国やその国民のイメージはそう易々と変わらないではないか」と反問してみたい。あるいは、大幅に譲歩して、特定の「歴史的日本像」を検証することは自己目的ではなく、むしろその作業をつうじて「現代の日本像」を逆照射するための迂路である、と説明することもできるであろう。

いずれにしても、比較文化論（あるいは異文化理解、ここでは日独交流史の研究）を展開する際には、その国際性と学際性という基本性格から見ても、研究情報の蓄積と交換がきわめて重要な意味をもつ⁽²¹⁾。本稿で掲げた「ドイツ啓蒙主義の日本像」という研究課題の場合であれば、これまで瞥見してきたように、すでにドイツの側からは十分な基礎資料が提供されているのである。そうした貴重な資料を存分に活用しながら、独自の「日本人の視点」からそれらを解釈し直し、より密度の濃い情報としてドイツの側に返信すること——これこそが今後われわれの果たすべき責務であると思われる。遙か時空を隔ててそうした地道な作業と対話を重ねる

こと自体が、すでに実践的な異文化理解の遂行として尊重されるべきである。

以上、本稿では先人たちの業績をごく表面的に紹介ないし批評することに終始し、私自身の本来の関心である「カントに定位してケンプファーの影響史を見定める」作業に立ち入ることはできなかった。その遂行は改めて後日を期することにして、ここでひとまず本稿を閉じることにはしたい。

註および文献表

- (1) 有福・坂部他編『カント事典』(弘文堂, 1997年) 所収の項目「日本」(391-392頁)。
- (2) ドイツ語圏における日本研究の実状については, Klaus Kracht (Hrsg.), *Japanologie an deutschsprachigen Universitäten*, (Wiesbaden 1990) を参照。1980年代までのデータであるが, 少なくとも研究機関や研究者・学生数を比較すれば「ドイツ語圏の日本研究」は「日本のドイツ研究」にはるかに劣っていると言える。ただし, 博士論文や特に教授資格論文の件数などに着目すると, 質的には両者が逆転しているのではないかという予断を抱かざるをえない。
- (3) 日蘭学会編/箭内健次監修『洋学関係研究文献要覧(1868-1982)』(20世紀文献要覧大系17, 日外アソシエーツ, 1984年) の第1部・主題編では「海外の日本研究」および「外国人の日本見聞」, 第2部・人物編では「ケンペル」という項目を設けて, 関連文献が網羅されている。予想外に件数が多く驚かされる。なお, 日独交流史全般に関しては, 田中梅吉『総合詳説 日独言語文化交流史大年表』(三修社, 1968年) および宮永孝『日独文化交流史——ドイツ語事始め』(三修社, 1993年) を参照。
- (4) 国立国会図書館専門資料館編『世界のみた日本——国立国会図書館所蔵日本関係翻訳図書目録』(国立国会図書館, 1989年) を参照。「地理・地誌・紀行」の「江戸時代」関連文献として, ケンプファーなど著作からの邦訳書が網羅されている。なお, 岩波書店が企画出版した大航海時代叢書(第I期~第III期, 1970年~1979年) は, そうした研究基盤整備の記念碑的な事業として評価されてよい。
- (5) 最近のケンプファーに関するドイツ語文献としては, 次の著作を参照。

Detlev Haberland, Engelbert Kaempfer (1651-1716) — Arzt, Reisender und »Entdecker« Japans, in: Japanische Kulturinstitut Köln (Hrsg.), *Kulturvermittler zwischen Japan und Deutschland. Biographische Skizzen aus vier Jahrhunderten*, Frankfurt a. M./New York 1990, S.9-30.

Detlef Halberland (Hrsg.), *Engelbert Kaempfer: Werk und Wirkung. Vorträge der Symposien in Lemgo (19.-22. 9. 1990) und in Tokio (15.-18. 12. 1990)*, Stuttgart 1993.

Lutz Walter (Hrsg.), *Japan mit den Augen des Westens gesehen. Gedruckte europäische Landkarten vom frühen 16. bis zum 19. Jahrhundert*, München/New York 1993. 本書は古地図の魅力を堪能させる良書であり, 解説もすばらしい。

(6) 小堀桂一郎『鎖国の思想——ケンペルの世界史的使命』(中央公論社〔中公新書358〕, 1974年〔第4版, 1993年〕)。資料史的には中間部をなす「三 ケンペルの日本観——『鎖国論』・本文と註解」(テキストは『廻国奇観』第2部第14章)がきわめて重要であるが、カント、フィヒテ、和辻などの思想家の鎖国観にも論及されていて興味深い。この点については、大橋良介『絶対者のゆくえ——ドイツ観念論と現代世界』(ミネルヴァ書房, 1993年, 第12講), 同『内なる異国 外なる世界——加速するインターカルチャー世界』(人文書院, 1999年, 終章)も参照。

なお、鎖国体制の実態を特に情報交換の見地から再検証した参考文献として、次の著作を参照。
川勝平太『日本文明と近代西洋——「鎖国」再考』(日本放送出版協会, 1991年),
市村祐一, 大石慎三郎『鎖国——ゆるやかな情報革命』(講談社〔現代新書1260〕, 1995年)
片桐一男『開かれた鎖国——長崎出島の人・物・情報』(講談社〔現代新書1377〕, 1997年)

(7) ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみた日本』(日本放送出版協会, 1996年)。なお、本書はケンプファーの長崎上陸300周年を記念して1990年に開催された企画展のための冊子を原型とし、その後『ケンペルのみたトクガワ・ジャパン』(六興出版, 1992年)として出版されていた。

(8) Peter Kapitza (Hrsg.), *Japan in Europa. Texte und Bilddokumente zur europäischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm von Humboldt*, 3 Bde., München 1990.

なお、啓蒙主義の時代における中国像を扱った研究書として、Willy Richard Berger, *China-Bild und China-Mode im Europa der Aufklärung* (Literatur und Leben, N. F. Bd. 41) Köln/Wien 1990を参照。また、ドイツを中心にヨーロッパの啓蒙主義を視野に収めた辞典として、Werner Schneiders (Hrsg.), *Lexikon der Aufklärung. Deutschland und Europa*, München 1955を参照。本書には項目「日本」が採録されている(担当は高橋暁雄)。

さらに翻訳書を含む日本語の参考文献(近代ヨーロッパの日本観などに関する著作)は、下記のとおり。

P・J・マーシャル, G・ウィリアムズ(大久保桂子訳)『野蛮の博物誌——18世紀イギリスがみた世界』平凡社, 1989年。(P. J. Marshall, Glyndwr Williams, *The Great Map of Mankind. British Perception of the World in the Age of Enlightenment*, London, Melbourne and Toronto 1982.) 本書ではアジア観の変遷が丹念に描かれている。

R・A・スケルトン(増田・信岡訳)『図説・探検地図の世界——大航海時代から極地探検まで』原書房, 1991年。(R. A. Skelton, *Explorer's Maps. Chapters in the Cartographic Record of Geographical Discovery*, London 1958.)

多木浩二『ヨーロッパ人の描いた世界——コロンブスからクックまで』岩波書店, 1991年。「第四章 もうひとつの旅行記——挿絵(一七, 八世紀のアジアへの旅)」では、モンタヌスの「日本図誌」(1669年)が紹介されている。全体としてきわめて刺激的な作品であり、地理学的な啓蒙理念を直観的に了解させてくれる。

海野一隆『地図に見る日本——倭国・ジパング・大日本』大修館書店, 1999年。近代ヨーロッパから見た——まさに視覚的な意味で「見た」——日本を理解するための資料として、本書も見逃せない。

(9) 同冊子5頁による。なお、カピッツァの新旧論争に関する研究は、Peter Kapitza, *Ein bürgerlicher Krieg in der gelehrten Welt. Zur Geschichte der Querelle des Anciens et des Modernes in Deutschland*, München 1981 にまとめられている。ノルベルト・ヒンスケ『批判哲学への途上で——カントの思考の諸道程』(有福・石川・平田編訳, 晃洋書房, 1996年)の「第四章カントと新旧論争」も参照。

なお、カピッツァは啓蒙主義者たちの目に映った儒教の姿について、次のようにまとめている。

「……興味ぶかいのは、ヨーロッパの啓蒙思潮期に現われた、日本とヨーロッパの宗教ないしは哲学傾向の比較である。すなわち、そこでは、日本仏教はヨーロッパ中世の狂信と、神道はギリシアの快樂説と、儒教はストア、スピノザ哲学および無神論と対比される。この件に関してもっとも興味ぶかいテキストは、Pierre Bayle いろいろ、フランス啓蒙思潮の中にもいくつも見られる。日本像のこのような変遷は、一面では、その時々ヨーロッパと日本のあいだの相互関係に左右されているとともに、他面、ヨーロッパ内での宗教・道徳および政治の分野における価値の転換の反映でもある。日本人は当初、知性を備えたよき異教徒であり、上述したごとく、不足しているのはキリスト教への改宗だけだとされていたのが、キリスト教徒の迫害が行われている間に、この日本人像も分裂をきたした。すなわち、片や古代キリスト教の殉教者たちにも比すべき不屈のキリスト教徒に対し、こなた、ローマ時代の血に飢えたキリスト教徒迫害者たちにも比すべき異教の野獣というわけだ。この論争にまったく新しい局面をもたらしたのは Kaempfer で、彼は、宣教師たちによるキリスト教化の試み以前には百パーセント認められており、彼の日本滞在中にも対キリスト教を唯一の例外として認められていた信教の自由を褒めそやす一方では、市民社会の規律にはなかなか服そうとしない日本人の国民的性格の、陶治にとって非常に重要になっていた儒教の役割を強調したのである。」(同冊子, 10頁)

ちなみに、ケンペファーに関するわが国の一般的な概説を見ておこなれば、ヨーロッパ諸国とアジア諸国を股に掛けて活躍した彼の生涯と彼の主著は、次のように紹介されている(以下の記述は、平凡社『世界大百科事典』[CD-ROM版]による)。

「ケンベル (Engelbert Kaempfer 1651—1716) 江戸中期に来日したドイツ人博物学者兼医者。ダンチヒ、クラクフ、ケーニヒスベルク、ウプサラなどの各大学で博物学および医学を修めたのち、スウェーデンの大使館書記官に採用され、ベルシア派遣使節に従って、ロシア経由でベルシアにおもむいた。この間、各地の博物および政治、地理、歴史などの知識を得た。さらに東方諸国に関心を抱き、1686年オランダ東インド会社に船医として入社、89年(元禄2)バタビアに着き、翌年、新日本商館長コルネリウス・アウトホールンに従って商館付医師の資格で日本に来朝、92年10月まで滞留した。その間、商館長に従って2回江戸参府を行った。ヨーロッパに帰ってから、94年オランダのライデン大学で医学博士の学位を得、晩年は故郷レムゴウで余生を著述にささげ、《廻国奇観》《日本誌》を著した。片桐一男」

「日本誌 (Geschichte und Beschreibung von Japan) ケンベル著の日本風物誌。ドイツ語の原著は英訳本(1727)の50年後に出版。1690年(元禄3)9月来日のオランダ商館付ドイツ人医師ケンベルは、92年10月離日までの間に商館長の参府に従って2回江戸に上った。多方面

ドイツ啓蒙主義と歴史的日本像の形成

の知識と教養と犀利な観察眼によって、日本の社会、風俗、政治、経済、宗教、歴史から動植物に至るまで観察記述し、みずから挿図の下絵を描いてまとめた。それまでほとんど想像の世界として描かれていた日本を、はじめて正確に記述してヨーロッパの読書界に紹介した書。邦訳に《日本誌——日本の歴史と紀行》のほか、抄訳として《ケンペル江戸参府紀行》（《異国叢書》所収）、《江戸参府旅行日記》（《東洋文庫》所収）などがある。片桐一男

なお、ケンプファーの生涯と功績については、宮永前掲書〔註(3)〕で詳述されている。加藤雅彦他編『事典 現代のドイツ』（大修館書店、1998年）も参照。

(10) Wolfgang Griep, Hans-Wolf Jäger (Hrsg.), *Reisen im 18. Jahrhundert. Neue Untersuchungen* (Neue Bremer Beiträge, Bd.3) Heidelberg 1986; Hans-Wolf Jäger (Hrsg.), *Europäisches Reisen im Zeitalter der Aufklärung* (Neue Bremer Beiträge, Bd. 7), Heidelberg 1992.

(11) 中川久定『啓蒙の世紀の光のもとで——ディドロと『百科全書』』（岩波書店、1994年、329-410頁、初出は『思想』1975年第2-3号）。

(12) 市川慎一『百科全書派の世界』世界書院、1995年。

(13) カント自身は『自然地理学』の陸圏論において、ヨーロッパの全体像でさえまだ十分に知られていないのは「地理学的な啓蒙 (geographische Aufklärung)」の不足であると表現している（アカデミー版カント全集第IX巻、232頁の註）。啓蒙と地理学との密接な関係については、1757年の『自然地理学講義概要』（同全集第II巻、3頁）でも説かれている。

(14) この点については、『自然地理学』の編者リンクが同書の序言で恨みがましく事情を説明している。リンクが時流に遅れまいと同書の出版を焦ったことにより、その拙速のつけが200年後の今日にまで及んでいると言ってよいであろう。

(15) たとえば、飯塚浩二によれば、「かのカントの地理学でさえ、自然の「奇異」 Merkwürdigkeiten に敬意を表することによって、如上の〔俗受けを狙うという〕好ましからざる傾向への追従を示していた。〔中略〕いずれにせよフンボルトとリッターとの両人が現れるまでの時代を支配していた傾向は、かように実利性に媚びて歪んだものであった。」（『人文地理学説史——方法論のための学説史的反省』、著作集第6巻、平凡社、1975年、31-32頁）。

(16) Helmut von Glasenapp, *Kant und die Religion des Ostens* (Beihefte zum Jahrbuch der Albrecht-Universität Königsberg), Kitzingen-Main, 1954. なお、理想社版カント全集の第15巻『自然地理学』（三枝充恵訳、1966年）には、このグラージェナップ版による日本関連の記述が採録されている。また、カピッツァの前掲書、下巻（507-509頁）にも、当該の箇所が採録されている。

(17) 自然地理学講義の日本に関する断片的な筆記録は、Glasenapp, *a.a.O.*, S. 112-116 による。

(18) 先行研究として、桑木厳翼「カントの観たる日本——附『カントの観たる日本』増補」（桑木厳翼著作集第三巻『カントとその周辺の哲学』所収、春秋社、1949年、369-392頁；初出は『カントと現代の哲学』岩波書店、1917年）を参照。桑木はそこで、本稿で紹介したグラージェナップ版の記載事項をまったく知らずに、既存の材料だけによってカントの日本観をほぼ的確に輪郭づけている。われわれは今日（あるいは今後）、カントの典拠などに関する桑木の臆説を、新たに獲得された資料

に基づいて詳細に検証する責務を負っているのである。

(19) この点については、グラーゼナップ前掲書の付論「カントの典拠」を参照。

(20) たとえば、17世紀中葉までの事項については飯塚浩二他『大航海時代——概説・年表・索引』（大航海時代叢書・別巻，岩波書店，1970年）の索引が参考となる。また、カピッツァ前掲書・別巻の索引も、きわめて利用価値が高い。

(21) 1998年秋，ある全国紙の文化欄に《現代に通じる「近代化」議論——「国際十八世紀学会」京都で開催》という大見出しで，パネリスト5名の顔写真入りの記事が4段にわたって掲載された。それによると，「学会長のドイツの仏文学者，J・シュロバハさんは「十八世紀のドイツの百科事典が描いた日本のイメージ」，国際執行委員会委員長のオランダの英文学者U・ジャンセンスさんは「西洋の鏡としての東洋」というテーマで，それぞれヨーロッパとアジアの異質性と共通性を解説した」そうである（1998年9月29日付朝日新聞，大阪本社・第10版，第13面による）。互いの過去の姿をめぐる国際的・学際的な学術研究が，現在はもちろんのこと，さらには将来に向けて，東西の相互理解を深めるための舞台となっていると言ってよいであろう。本稿はいつの日かそうした舞台上るための下準備として構想されたものである。

[付記] 本稿は日本独文学会北陸支部研究会における口頭発表「ドイツ啓蒙主義の日本観——カントの地理学思想を中心として」（1998年10月30日，金沢）を原型とし，福井医科大学ドイツ語教室が刊行する「SDA [Studien zur deutschen Aufklärung] 通信」（創刊号および第2号）に掲載された書誌情報などを取り込んだうえで，さらにその後には獲得した新たな知見を盛り込みながら大幅に加筆して成立した。なお，本稿を作成するに当たって，情報収集のために福井医科大学情報処理センター（教育研究用電子計算機）を利用した。

[追記] 本稿を脱稿してほどなく，ベアトリス・M・ボダルト＝ベイリー，デレク・マサレラ編『遙かなる目的地——ケンベルと徳川日本との出会い』（中・小林訳，大阪大会出版会，1999年7月刊，原書は Beatrice M. Bodart-Bailey, Derek Massarella (ed.), *The Furthest Goal. Engelbert Kaempfer's Encounter with Tokugawa Japan*, Japan Library, 1995) を知った。本書はシーボルト協会（東京）と編者ベイリーの共催によるケンプファー来日300年記念シンポジウム（1990年12月，東京）の成果を纏めたもので，主に英語圏出身の研究者たちが『日本誌』の諸問題を多角的に論じている。国際的なケンプファー研究の現況を知るうえで，本書は見逃すことができないであろう。また，カール・マイヤー『東洋奇観——エンゲルベルト・ケンベルの旅』（宮坂真喜弘訳，八千代出版，1980年，原著は Karl Meier-Lemgo, *Engelbert Kaempfer (1651-1716) erforscht das seltsame Asien*, 1960, Hamburg) も，ケンプファーの生涯と活動の全容を知るための邦語基本文献として，忘れられてはならない。